実践報告

幼保小の連続性を学び合い，相互理解を図る実践的試み
―西九州大学附属三光幼稚園・三光保育園を事例として―

福元芳子[1]・松尾正幸[2]

[1]西九州大学附属三光幼稚園・三光保育園
[2]西九州大学子ども学部子ども学科，西九州大学附属三光幼稚園

（平成23年11月30日受理）

A Practical Studies on the Continuity and Mutual Understanding among the Kindergarten, Nursery School and Primary School.
―The Case Studies of Sankou Kindergarten and Sankou Nursery School attached to Nishikyushu University―

Yoshiko FUKUMOTO[1] and Masayuki MATSUO[2]

(1) Sankou kindergarten and Sankou nursery school attached to Nishikyushu University.
(2) Department of Children’s Studies, Faculty of Children’s Studies, Nishikyushu University.
Sankou kindergarten attached to Nishikyushu University.

（Accepted November 30, 2011）

Abstract

Fifteen years has passed since the advocate of cooperation among the kindergarten, nursery school and primary school started in Japanese education. Now, we have many problems and assignments that should be solved about the cooperation among them.

In this report, we report the following three points;

① the present condition of cooperation among the kindergarten, nursery school and primary schools in the school attached to Nishikyusyu University

② the unsolved problems and assignments of cooperation among those schools as a result of the questionnaire to teachers of Sankou nursery school, Sankou kindergarten and primary school.

③ the educational practice of Sankou school teachers on the continuity among those schools

Key words：Articulation　接続
Continuity　連続性
Cooperation　連携
Mutual Understanding　相互理解
Preschool Education　幼児教育

１．はじめに

平成12年４月から改訂された幼稚園教育要領[1]では，第３章指導計画作成上の留意事項，１一般的な留意事項(8)に，幼稚園においては，幼稚園教育が，小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し，幼児期にふさわしい生活を通して，創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすることが明文化され，小学校教育との連携・連続性が求められた。また，小学校学習指導要領[2]では，第１章総則において，小学校と幼稚園との間の連携や交流を図ることが明確に示された。西九州大学附属三光幼稚園（以下，本園）における小学校との連携は，平成12年度から年長児と佐賀市立若楠小学校及び神野小学校２校の１年生との交流から始まった。

平成21年４月から改正された新しい幼稚園教育要領[3]では，上記に加え，２特に留意する事項(5)において，幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため，幼児と児童の交流の機会を設けたり，小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりすることなどが新たに盛り込まれた。

一方，これまで通知であった保育所保育指針が平成20年３月28日告示化され，平成21年４月から新しい保育所保育指針[4]が施行された。小学校との連携については，第４章保育の計画及び評価，１保育の計画，(3)指導計画の作成上，特に留意すべき事項，エ小学校との連携（ア）子どもの生活や発達の連続性を踏まえ，保育の内容を図るとともに，就学に向けて，保育所の子どもと小学校の児童との交流，職員同士の交流，情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るよう配慮することや（イ）子どもに関する情報共有に関して，保育所に入所している子どもの就学に際し，市町村の支援の下に，子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付されるようにすること等が明記された。

幼稚園については，学校教育法施行規則第24条と第28条において，「幼稚園幼児指導要録」の小学校への送付が規定されており,「保育所児童保育要録」については，保育所保育指針解説書に[5]おいて，送付するようになったことが述べられている。

平成19年度新規開設した西九州大学附属三光保育園（以下，保育園）では，平成21年度卒園児より，本園と同様に就学先の小学校へ要録を送付している。

本稿では，幼小連携が始まり12年を経過した現在の本園における幼小連携の現状と，幼小の現場から見た今後の課題について，保育者と小学校教員にアンケートを行った結果を報告する。また，連続性を意識した保育の研究について本園が行った実践事例を報告する。

２．方　法

２.１　小学校の先生方との取り組み

２．１．１　卒園児の入学校状況

例年120名前後の卒園児が進学する小学校名を，平成13年度から平成22年度までの10年間について，要録の送付先控えを基に調べ集計した。

２．１．２　本園と保育園における幼保小連携の取り組み

三光幼稚園・保育園（以下，両園）と連携校である佐賀市立神野小学校と若楠小学校での，年長児に関する取り組み，新１年生に関する取り組み，保育者と小学校教員間における取り組みはどのようなことが行われているか，園の記録簿を基に調べた。

２．１．３　幼保小の現場からみた今後の課題

幼稚園・保育園から小学校への接続期の教育を考えていく上で，保育者と小学校の教師が考える現場の課題を知るために，神野小学校教諭26名と本園の保育者35名を対象にアンケート調査を実施した。調査は平成23年１月20日と２月１日に行い，回収率100%であった。アンケートの質問は，小学校の移行がスムーズにいっているかどうかについて，「スムーズにいっている」「どちらでもない」「スムーズでない」から１つ選んでもらい，更に，スムーズだと答えた人には，「基本的生活習慣面」「友達とのコミュニケーション面」「生活や学習態度」の３つからどこがスムーズだと思うかで答えてもらった。(複数回答）どちらでもないと答えた人には，同様にどこがどちらでもないと思うのか答えてもらった。(複数回答)

また，自由記述欄では意見や気づきを書いてもらった。

２.２　本園の実践事例

２．２．１　研究テーマ

本園では，研究テーマを「連続性を意識した保育の研究」に設定し，平成22年度から平成23年度にかけて取り組んだ。

１）年少児（満３歳児・３歳児）

「身の回りのことが自分でできるようになるための個人の発達に合わせた教師のかかわり」
２）年中児（４歳児）
「自立へ導くための子どもの心に寄り添った教師のかかわり」
３）年長児（５歳児）
「子どもの自主性が芽生え，自分で考え行動するための教師のかかわり」
２．２．２　研究内容
１）幼稚園教育要領の改訂のポイントである幼児の自己成長力をもとにした保育，意図的な環境によって幼児の主体的な活動を促す保育の理解を図る。
２）５領域別のねらいと内容を理解し，教師のかかわりを学ぶ。
２．２．３　研究方法
１）月２回，２週間分の指導計画を学年ごとに作成する。
２）毎月，月末に翌月の教育課程と指導計画の修正を行い実践と検証を行う。
３）毎日，保育の振り返りと課題を記録にとる。

３．結　果

３．１　小学校の先生方との取り組み

３．１．１　卒園児の入学校状況
卒園児の入学校は，平成13年度から平成22年までの10年間における卒園児の入学校別人数をみると，神野小学校225名，若楠小学校223名，高木瀬小学校188名，鍋島小学校121名，佐賀大学文化教育学部附属小学校98名が上位５校で，全体の70.5%を占めている。（表１）また，29.5%が佐賀市内外及び県外を合わせて15～25の小学校へ入学している。
３．１．２　両園における幼保小連携の取り組み
保育者を含む両園の代表者は，小学校区である佐賀市立神野小学校と同若楠小学校の幼保小連携会議に出席して，情報交換を行うことや保育者と教師の相互訪問，幼児と小学生の交流を中心とした取り組みを行った。
１）年長児に関する取り組み
①就学相談
両園では，４月に佐賀市教育委員会こども課から届く就学相談のしおりを各家庭に配布し，希望した園児の家庭に対しては，６月と８月に就学相談が実施されていた。要請があれば両園の担任も出席した。
②卒園児の就学先調査
佐賀市教育委員会こども課による年長児の就学先調査が11月頃に実施され，就学する小学校名の他，特別に配慮が必要な子どもに関する項目もあり，特別に配慮が必要な子どもに対しては，子ども課の担当者や就学先の小学校から担当者が両園に訪問され，子どもの様子を観察したり，両園でのかかわり方や配慮している内容について意見交換を行った。
③入学する小学校１年生との交流
入学予定の小学校から各家庭に案内状が送付されているが，神野小学校と若楠小学校の入学予定者は両園から集団で連れて行き，小学１年生と90分程度の交流をした。（写真１）交流の内容については，各小学校が計画した。

写真１　小学校１年生と年長児の交流

④要録写の提出
佐賀市内の卒園児が入学する小学校と連絡をとり，要録の写しを担任が持参し，その際に子どもの育ちについての引き継ぎを行った。特別な配慮を要する子どもに関しては，後日小学校の方から両園に訪問されさらに詳しく話をすることもあった。遠方や県外には郵送した。
２）新１年生に関する取り組み
①学校訪問
４月から５月にかけて，佐賀市教育委員会こども課が主催する「わくわく授業参観」では，幼稚園や保育園の関係者が希望する小学校の新１年生の授業を参観することができた。平日に行われるため，園長や副園長，主任が交代で訪問した。最後に小学校との意見交換の場も設けられているため，気になる子どもの状況等を具体的に知ることもできた。
②運動会参観
休日に開催されるため，卒園児の担任等が子ども達の様子を見に行くことが多々見られた。

表１　三光幼稚園　卒園児の進学校状況

所在地	学校名	H13（人）	H14（人）	H15（人）	H16（人）	H17（人）	H18（人）	H19（人）	H20（人）	H21（人）	H22（人）	計（人）	割合（%）
佐賀県佐賀市	神野小学校	15	15	20	28	20	30	20	22	23	32	225	18.5
	若楠小学校	25	28	27	30	18	17	24	23	14	17	223	18.4
	高木瀬小学校	17	18	21	15	21	19	22	20	14	21	188	15.5
	鍋島小学校	13	9	11	14	15	11	11	13	13	11	121	10.0
	佐大附属小学校	6	8	9	11	13	8	12	8	14	9	98	8.1
	開成小学校	8	6	6	8	7	7	9	6	5	11	73	6.0
	兵庫小学校	5	6	4	11	2	2	1	3	7	4	45	3.7
	春日小学校	5	3	4	1	2	5	3	6	2	3	34	2.8
	春日北小学校	6	2	3	1	3	1	4	3	3	1	27	2.2
	勧興小学校	3	1	5	2	3	3	4	2	7	2	32	2.6
	循誘小学校	4			1			1		2	2	10	0.8
	新栄小学校	2	1		1	2	2		2	2	2	14	1.2
	日新小学校		1				1	1	1	4		8	0.7
	嘉瀬小学校					1			1		1	3	0.2
	赤松小学校		1		2	1	1	2	1	3	1	12	1.0
	金立小学校		1							1	1	3	0.2
	川上小学校			1		2	2		1			6	0.5
	巨勢小学校										1	1	0.1
	本庄小学校			1		1				1		3	0.2
	北川副小学校			1	1	1	1	1			2	7	0.6
	西川副小学校									1		1	0.1
	西与賀小学校					1					1	2	0.2
	東与賀小学校				1	1		1		1		4	0.3
佐賀県佐賀市外		2	1	4	3	5	7	8	8	2	4	44	3.6
県外	福岡県			2	1	2	3	1			1	10	0.8
	熊本県							1	1			2	0.2
	大分県										2	2	0.2
	鹿児島県										1	1	0.1
	沖縄県								1			1	0.1
	広島県										1	1	0.1
	神奈川県				1						1	2	0.2
	京都府										1	1	0.1
	愛媛県							1				1	0.1
	愛知県							1				1	0.1
	東京都							2				2	0.2
	山口県	1					2					3	0.2
	鳥取県						1					1	0.1
	千葉県		1									1	0.1
	合計	112	102	119	132	121	123	130	122	119	133	1213	100.0
備考	うち保育園児								3	5	9	17	

③フリー参観

佐賀市内の小学校では年２回程度，休日に開催されていたため，保育者も気楽に参観して，子ども達の小学校での育ちを見守った。特に，気になる子どもの入学先には職員間で調整をして様子を見に行った。

３）保育者と小学校教員間に関する取り組み

①幼保小連携会議

神野小学校と若楠小学校では年３回開催され，幼稚園や保育園の保育者と小学校教員との情報交換や意見交換を行った。12月の会議では，就学前健康診断で学校側が気になった園児に関して，両園での様子等情報交換をした。

②幼保小合同研修会

表２　小学校への移行のスムーズさについて

	小学校の教師	(%)	幼稚園・保育園の保育者	(%)	p 値*
ほとんどの子がスムーズにいっている	13	50.0	8	22.9	0.027
どちらでもない	13	50.0	27	77.1	
合計	26	100	35	100	

＊X^2検定

佐賀市教育委員会主催で年に２回程開催された。最近では，主に幼保小連携に関するシンポジウムや講演が行われた。

③「えがお」研修会

11月頃，佐賀市教育委員会が発行する「えがお」[6]の冊子をもとに研修が行われ，年長児担任が参加した。平成22年度と平成23年度「えがお」作成委員会には，附属幼稚園教諭も委員として参加した。

④小学校教師の保育体験

主に夏休み期間中に，小学校教員が幼稚園や保育園を訪問し，幼児の生活状況を観察された。幼稚園訪問では，預かり保育の満３歳から５歳児を対象に，子ども同士のかかわり合いや，保育者の子どもへの接し方，使用している教材等を観察する姿が多く見られた。保育園では,0歳児から５歳児までのクラスに入り子どもと直接ふれ合う体験をされた。（写真２）

写真２　小学校教師の保育体験

３．１．３　幼保小の現場からみた課題

１）小学校への移行のスムーズさについて

小学校の教師13人（50.0%）がほとんどの子どもが「スムーズにいっている」と答え，13人(50.0%)の教師が「どちらともいえない」と答えた。（表２）「スムーズにいっている」と答えた教師のうち10人が「基本的生活習慣面」と答え，「生活や学習態度」が７人,「友達とのコミュニケーション面」が３人

表３　移行が「スムーズだ」と思うところ（複数回答）

		あてはまる（人）
基本的生活習慣面	小学校の教師	10
	幼稚園・保育園の保育者	3
	合計	13
友達とのコミュニケーション面	小学校の教師	3
	幼稚園・保育園の保育者	2
	合計	5
生活や学習態度	小学校の教師	7
	幼稚園・保育園の保育者	3
	合計	10

表４　移行について「どちらでもない」と思うところ（複数回答）

		あてはまる（人）
基本的生活習慣面	小学校の教師	7
	幼稚園・保育園の保育者	11
	合計	18
友達とのコミュニケーション面	小学校の教師	6
	幼稚園・保育園の保育者	9
	合計	15
生活や学習態度	小学校の教師	9
	幼稚園・保育園の保育者	16
	合計	25

となっている。（表３）一方，保育者では移行が「スムーズにいっている」と答えた人は８人（22.9%）で，27人（77.1%）が「どちらともいえない」と答えた。（表２）「スムーズにいっている」と感じた人のうち,「基本的生活習慣面」が３人,「生活や学習態度」が３人,「友達とのコミュニケーション面」が２人と答えた。（表３）

また，小学校への移行のスムーズさについて，小学校の教師と保育者間でX^2検定を行ったところ有意差ありで，所属による捉え方に違いがあった。

スムーズにいっていないと感じた教師のうち，その９人が「生活や学習態度」，次いで７人が「基本

的生活習慣面」と答え，６人が「友達とのコミュニケーション」と答えた。（表４）

一方，「どちらともいえない」と答えた保育者は，「生活や学習習慣」16人，「基本的生活習慣面」11人,「友達とのコミュニケーション面」９人と答え，２人が「その他又はわかりません」と答えている。

２）自由記述

自由記述は大きく分けると，学習面，生活習慣面，食事・給食，その他の４つに分けられた。学習面では，小学校の教師から見た新１年生の特徴として，「学習意欲があり，勉強を楽しみにしている子が多い」ことがあげられていた。食事・給食では，小学校教師が「時間内に食べることができない」と答えていた。生活習慣面では，小学校教師が「ハンカチの不携帯」「椅子の座り方」に課題があると答え，保育者も「机，いすに座る練習が必要（45分）」と答えていた。その他では，小学校教師が,「連鎖反応（まね）が起きやすい。今，何をする時か考えられるようになってほしい」「(本園卒園児や保護者が）他園の子どもと交わった時にコミュニケーションの取り方で戸惑うことがある」と答えていた。保育者は,「(要録の活用について）一人一人の３年間の記録を小学校ではどう活用してあるのか。記録からどのような体験をしてきたか読み取ってほしい」「幼保小の担任間での意見交換を通して共通理解が必要」「不登校児童がいる場合，園に連絡してもらえばできる限りフォローしてあげたい」等の記述があった。

３.２　本園の実践事例

１）～３）は，各学年の担任の記述を引用した。

１）年少児（満３歳児・３歳児）

「身の回りのことが自分でできるようになるための個人の発達に合わせた教師のかかわり」

園生活の第一歩として，まずは安心して子どもが過ごせるようかかわった。３歳児の育ちは個人差が大きいため，一人一人の発達に合わせた教師のかかわりや援助が必要であった。教師は個々の発達段階を把握しながら次のステップに導き，自分でできることを増やしていくかかわりが必要であった。例えば，５月の「言葉」の領域の指導のねらいである「自分の思いを言葉や動作に表せるようにかかわる」では,「ママがいい～」と言って泣いている子に対し,その気持ちを受け止めつつ，どうしてママがいいと思ったのか（寂しくなったのか，嫌なことをされたのか，できないことがあったのか，等々）を聞き出せるようかかわり，そして，泣いている原因がわかると,「そうだったの。そんな時はこれから〇〇って言おうね。」と，泣きたくなった気持ちをこれからは言葉で言い表せるように丁寧にかかわっていった。そのかかわりを積み重ねていくうちに，段々と「どうしたの？」の問いかけに，困ったことなど,泣きながらでも言葉で伝えることができるようになった。そうすると，担任も「じゃあ，こうしてみようか？」「こうしてみたらどうかな？」等，その子のペースや反応に合わせて対応することができるようになったので，子どもも納得して次の行動に移ることができていた。こうして，子どもは自信と喜びを少しずつ経験し，次の発達に繋がっていた。この様子は子どもの表情からも読み取れ，様々な活動への意欲にもつながっていた。年少児担任としては,この過程を丁寧に見守り，子どもの自信に繋がる体験を繰り返していくかかわりが必要だと感じた。

（年少児担任）

２）年中児（４歳児）

「自立へ導くための子どもの心に寄り添った教師のかかわり」

年中組に進級し，担任や友達をはじめ新しい環境に慣れるまでに戸惑いや不安を感じる子が多い。新入園児や保育園児が混合したクラス編成にもなるため，安心して過ごせるよう子どもの思いに寄り添った細やかな教師のかかわりが必要であった。大半が年少組から進級した園児であったが，前年度の一人一人の子どもの育ちを把握し，年少組からの連続性を意識した保育を心がけていった。５月の領域「表現」の指導例では，絵の具の使い方に，経験のある子（進級児）と経験のない子（新入園児）がいるという実態から，経験のある子には道具の使い方の確認をとりながら伸び伸びと描くことを楽しめるような言葉かけを大切にし，経験がない子には，一つ一つ丁寧にやって見せ，楽しみながら道具の使い方を知ることができるようにかかわった。また，少人数に分けて行うことで一人一人の使い方を教師がしっかりと確認し，個別の声かけや援助を行うことができた。幼稚園生活１年目と２年目の子では，同じクラスにいながらも指導の目的を少し変えて個別の対応ができるよう教師自身が常に心がけた。また,「人間関係」の領域では，遊びの中で，一人一人の子どもと教師が信頼関係を作っていくよう心がけた。子ども同士の小さなグループができると，次に中程度

のグループができ，徐々に集団でのグループ遊びに発展していく。遊びの中で，子どもたちの人間関係が発展していくことを教師は意識し，いろいろな遊びを次々に提供するのではなく，安心して遊べるように一つの遊びを重点的に行った。幼稚園生活の浅い子どもは，遊びに対しても，何をして遊べばいいのかわからず不安になっていたが，同じ遊びを続けることで，安心して遊びに加わることができる子が増えた。「鬼ごっこ」という遊びから，子どもたちが自分たちで考え発展させた遊び「バナナ鬼」「ハンバーガー鬼」等を楽しむ姿も見られ，連続して遊びを続けることで，子どもたちでイメージした遊びが生まれ，子ども同士の繋がりも生まれていった。次に，新しい環境での生活習慣を見直していくことも心がけていった。自立に導くためには，細やかな目標とテーマが必要と感じたため，毎月ごとに目標とテーマを決めてカリキュラムに入れ，教師同士話し合っていった。人格の形成には，ありのままの子どもの姿や子どもの思い，心の動きを教師がしっかりと受け止め，一人一人への理解を深めていくことが必要だと思った。自立へ導くためには，基本的な生活習慣と自分のことが自分で言えることが大切であり，それは連続している課題といえる。

（年中児担任）

3）年長児（5歳児）

「子どもの自主性が芽生え，自分で考え行動するための教師のかかわり」

子どもの自主性を育てるために，「やってみたい，こうしたい，こうしたらどうなるのだろう」と思う子どもの気持ちを引き出し，受け止める教師のかかわりを心がけた。お祭り広場のおみこし作りでは，2つのクラスで1つのおみこしを作るため，「どんなおみこしを作りたいか」をテーマにまずクラスで話し合った。個々の意見を出し合い，自分たちが描いたイメージの1つのおみこし案がまとまると，今度は2つのクラスが合同で話し合った。一方が「お城のようなおみこし」，もう一方が「三光幼稚園みたいなおみこし」を主張し譲らなかった。教師は，そこでも子どもの考えを大切にできるよう話し合い，子どもたちが黙り込んで考えている時間待った。すると，一人の子が「三光幼稚園がお城になったようなおみこしを作ったら？」と発案し，子どもたちが喜んで賛成した。その後，おみこしの名前はどうするかを聞くと，「三光城はどう？」というまた別の子どもの提案にみんなが賛成した。その後，一人一人の気づきや発案が形になり，みんなの思いが詰まったものになるよう心がけた。中には，自分の思い描いたおみこしを絵に描いて持ってくる子も出てきて，子どもたちの気持ちが一気に盛り上がっていった。製作段階になると，とても意欲的に取り組んだ。子どもの意見を引き出し，子どもが主体的に作り上げる活動・行事になるよう教師は，問いかけたり見守ったり，気長に待ったりしながら，かかわった。友だちと共に工夫したり協力し合ったりする環境づくりでは，子どもの思いを大切にし，教師が手を出したり口を出すことのないようかかわることも必要であった。また，自分の意見，相手の意見を伝え合うことで，折り合いをつける力やみんなで気持ちを合わせる力も少しずつ付いていったのではないかと考える。

教師は，その経験を通して子どもが自信をつけ，自分で考えて行動できるようにかかわり，また，子どもがどのような思いでその遊びや活動に取り組んでいるのか，内面の育ちを読み取りかかわっていくことが必要だと感じた。自分達で考えそれを主張し，友だちと意見を交わす中では，ぶつかり合いも起きたが，相手の気持ちにも気づくようになっていった。このような経験を様々な場面で積み重ね，友だち同士で話し合いや折り合いをつけることもできるようになっていった。教師はそばで見守り，子どもが困った時にはいつでも手助けしてくれる温かい存在であることが必要である。　　　　（年長児担任）

4．考　察

4.1　小学校の先生方との取り組みに対する考察

本園（平成20年度から保育園児も含む）の園児の入学校は，平成13年度から平成22年度まで，その93.9%が佐賀市内23の小学校に入学している。また，全体の70.5%は近郊の5つの小学校に入学しているが，連携する神野小学校と若楠小学校へ入学する卒園児は全体の36.9%である。この卒園児に関しては，わくわく授業参観や保育者と小学校教師との情報交換の場を通して，保育者がその後の育ちを知ることができるが，他の63.1%の卒園児の入学後の情報は得ることが難しいのが現状である。保育者からは，附属幼稚園・保育園の連携校が増えるとよいのではという意見も出たが，小学校側では，毎年，30前後の幼稚園・保育所等から入学してくるので，全ての出身園と連携をとることは難しいということであっ

た。しかし，佐賀市については，教育委員会にこども課が設けられ，指導主事及び特別支援児担当者等を通して小学校と連絡をとることが可能である。

また，小学校教師の自由記述の中に，「連鎖（まね）反応がおきやすい。今，何をする時なのかを考えられるようになってほしい」や，「附属幼稚園児や保護者が他園の子と交わった時にコミュニケーションの取り方で戸惑うことが見られているので，入園前に他園との交流を持ったらどうか」という提案も出されていた。保育者の記述にも「近隣の幼稚園同士の交流，佐賀市全体での子どもの交流があるとよいのでは」という意見があり，小学校と保育現場共に，連携に関する同じような点を課題として挙げていることがわかった。これらを合わせても，友達とのコミュニケーション面，生活や学習態度が今後の課題となるものと思われる。

また，両園におけるこれまでの幼保小連携の取り組みの内容については，年長児，新１年生，保育者と教師間の３つの視点から11項目の取り組みを記述したが，本園の保育者からは，幼保小の現場から見た今後の課題に加え，現場の保育者と小学校教師同士が気さくに情報交換をできる場がほしいという意見が出されている。幼保の大半では人事異動は少ないが，小学校においては短期間で移動があるため，なかなか難しい課題であると感じる。

４.２　本園の実践事例に対する考察

３学年の担任が共通して，個々の子どもの育ちをしっかりと観察し，発達段階に合わせて，「ねらい」「目的」「こう育ってほしいという教師の願い」を明確にした指導計画が必要であると感じた。そして，教師は，子どもたちが自らかかわっていきたいと思える環境を考えて構成し，子どもが環境にどうかかわっているかをしっかりと見守り，柔軟にかかわっていくことが求められる。幼児期は人格形成の土台作りであるが，その育ちには何よりも園や教師の温かい雰囲気が重要で，その中で自己を発揮したり，のびのびと安心して行動できる子どもの育ちに繋がっていくことがわかった。これらの研究からも，入園した時から，個々の育ちの過程をしっかり捉え，担任から担任への確かなつなぎや幼保から小学校へのつなぎを大事にしていく体制も必要である。

５．おわりに

「連携」から「接続」というキーワードに変って研究を始めた時，幼児教育（特に年長児）と小学校教育との接続とは，具体的にどのようなものなのかについて保育者の関心が集まった。「指導計画に幼小共通の遊びや活動をどのように入れていくのか」「幼稚園・保育園での体験が小学校の教科にどう関連していくのか」「小学生との交流方法はどのように進めたらよいのか」「特別な配慮を要する子どもの情報はどのように伝達するのか」等，保育者には疑問や不安が多くみられたが，佐賀市教育委員会が発行している幼児教育と小学校教育とのつながりを意識した，年長児の後半から小学校１年生の５月頃まで約半年間の接続期のプログラム「えがお」「わくわく」に紹介された実践例を見ることや本園の保育者が「えがお」作成委員として編集に携わることで，保育者は接続期についてのイメージが具体的に見え出し，疑問や不安も減って，最近では子どもにとっても家庭にとってもスムーズに移行していると感じる。

一方，現場の保育者と小学校教諭のアンケート結果からは，まだ半数が問題有りと感じていた。その内容として，生活習慣面ではハンカチの不携帯，椅子の座り方，給食面では好き嫌いが多いこと，時間内に食べ終わらないこと等があり，学習中の態度やコミュニケーションの取り方にも課題があることがわかった。他方，学習面では，学習意欲があり勉強を楽しみにしている子どもが多いこともわかった。幼稚園・保育園ではできていたことが，小学校ではできなくなるものがある半面，学習面では意欲的な育ちが見られた。これは，家庭や子どもを取り巻く教育環境が何を重視しているかという価値観の相違も影響しているのではないかと推測する。

アンケートの回答から見えた本園の課題として，現場の小学校教師の生の声を聞く機会や，保育者と小学校教師が遠慮なく意見交換ができる場で，子どもの問題について相互理解を深めたり，また，地域（校区）に住む様々な幼稚園児や保育園児，その保護者同士が交流して知り合いになることも必要ではないかと感じた。

2010年11月に出された，「幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の在り方について（報告）」[7)]では，新たな課題が提案された。幼児期の教育と児童期の教育の目標として，「学びの基礎力」があげら

れ，その育成を図るため，「三つの自立」（学びの自立，生活上の自立，精神的な自立）を養うことが必要であると明記されている。これまでの幼小の滑らかな接続に加え，幼児期から小学校低学年も含めて「接続期のカリキュラム」を考えていく必要がある。そのためには，現場の保育者と小学校教師の学び合いと相互理解がますます重要になってくると考える。両園の新たな課題である。

6．参考文献

1）文部省「幼稚園教育要領」平成10年12月14日改訂
2）文部省「小学校学習指導要領」平成10年12月14日改訂
3）文部科学省「幼稚園教育要領」平成20年３月28日改訂
4）厚生労働省「保育所保育指針」平成20年３月28日改訂
5）厚生労働省「保育所保育指針解説書」ひかりのくに，p174-176（2008）
6）佐賀市教育委員会・幼保小の接続を考える会 平成23年度版「えがお」「わくわく」
7）文部科学省，幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」平成22年11月11日